

ニジェール支所便り

2019年12月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 新・支所長のつぶやき ～ピリピリと Perfume とよくものがこわれる件 ぱーと1～
- 久々企画！短期出張者が見たニジェール～南アフリカ事務所・高橋早苗企画調査員～ローカルビールにかける熱い想い - 幻のピアニジェール・キリンビールを求めて～
- 11月の支所の活動紹介
～第2回 CARD ワークショップ開催
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ2～
～PASVA：農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第24話 - 都市と農村の金属リサイクル・センター～
- 巻末連載企画！ODのいちおし

新・支所長のつぶやき ～ピリピリと Perfume とよくものがこわれる件 ぱーと1～

近頃のニアメの朝はとて涼しく着任した5月に比べると別の国にいるようである。しかし少し日が高くなると気温も急激に上昇してきて、やはりニアメは暑い。アメリカンスクールでの毎週土曜9時からのテニス練習1時間、続いてジムのトレッドミルで(自分としては)スピードラン2km。

帰ってきて昼下がり、台所で Dream Fighter を聞きながら、少し大きめでいびつな形のサクランボのような真赤なピーマンをリズムに合わせ刻んでいた。ピリピリの製作である。ニジェール名物の紫タマネギと人参を刻んで加え、瓶に詰めて、塩少々、ピネガー、レモン汁を適当に加える。(それにオリーブオイルでふたをして常温で2日置けばできあがりなのだ、)瓶に詰めたところで、ピンポン！と呼び鈴がなったのが聞こえた。なんだなんだ。

出ると拙宅のガルディアンが、「パトロン。ルフイル デレクトリシテ アトンベ」と言う。

「電線が落ちた!？」

外で何か起きているようなので、ツツカケをはいて出してみると、確かに電柱からうちに来ている電線が垂れ下がって前の道を塞いでいるではないか(つてか、もっと慌てて言いに来いよ!)。隣には折れた大きな樹の枝も転がっている。

車が通行できそうにないので、ニジェレックに電話して「大至急修理にきてくれ」と伝えるようにガルディアンに言うと、少しして、「電気料金領収書をもって来るようにとニジェレックが言ってます。」
「はあ???なんで“こっち”が行かなきゃならんのだっ!! しかも領収書ってなに?」



タクシーが立往生している。
(所長、指が入っちゃってますよ!)

埒があかないので当支所のハッサン総務経理担当に電話して頼む。

しかしニジェールはなかなか来ない。

そのうち暗くなってきた。タクシーなんか気付かずに引っ掛けたら拙宅は完璧に停電である。

心配になって出てみると、**そこで見たものは...**（以下次号に続く）。

久々企画！ 短期出張者が見たニジェール ～ローカルビールにける熱い想い ー幻のピアニジェル・キリンビールを求めて～

ニジェールに初訪問された南アフリカ事務所の高橋早苗企画調査員（広域経理）から、現在では希少価値が非常に高くなってしまったニジェールが誇るローカルビール（通称コンジユクチュール）にまつわる貴重なお話を投稿して頂きました。

10月31日から5日間、アフリカ監事監査の会計監査同行でニジェールを初訪問した。

ニジェールはずっと行ってみたかった国の一つで、テネレ砂漠は昔からの憧れだが、治安上ニアメ市内しか行動できない現在、週末もニアメ市内でおとなしく過ごした。砂漠旅行はいつか近い将来の楽しみにとっておくことにする。

私の趣味は、世界各地でローカルビールを飲むことである。アフリカ広域経理という仕事柄、ほぼ毎月アフリカ大陸にある事務所・支所・FOを訪ねては現地ビールを楽しんでいる。

さて、10月31日、乾燥した暑い暑い日の午後にニアメ空港に降りた。新しいモダンな空港を見て心が弾んだが、内容はアフリカあるあるであった。バグゲージのプラオリティタグって何？状態で、訳の分からない大量の段ボールが荷物の回転台を次々回っていくのを見送りながら、自分の荷物をひたすら待つ。普段の旅行&出張は機内持ち込み荷物だけなのでこの時間がもどかしい。回転台は荷物がスタックして、4回ほど停止していた。やっと回ってきた自分の荷物をピックアップ、運転手を待っている間に建物外にあるI LOVE NIAMEYのインスタ映えするオブジェの写真の撮ったりした。その後、運転手と合流して、市内のグランドホテルにチェックイン、そしてニジェール支所に出向き、安全と業務のブリーフィングなどを受けてこの日の仕事が終わった。

18時30分お待ちかねのビールタイム。飲み物はもちろんローカルビールのピアニジェルでしょ！注文すると、店員から返ってきたのは「ない」という悲しいフランス語。すでにビール工場が閉鎖され、ピアニジェルは市場に流通してないとのこと。なんということ！ショックが大きすぎる。ただ私の辞書にビールを飲まないという選択肢はないので、この日は仕方なくハイネケン飲みました。ハイネケン、2019年ラグビーワールドカップのスポンサーありがとう！南アフリカ優勝おめでとう！！（グランドホテルのバーでテレビ見ながら一人応援しました）ほかにもCastle、Flag、BrakinaとかSO.B.BRAとか飲みました。

ところが日ごろの行いが良いのか、ピアニジェルが死ぬほど飲みたいという熱い想いが通じたのか、幻のビールを見つけ出しましたよ。バルトロメウディアスが喜望峰を発見したくらいの大発見！

週末の土曜夜に行ったBraviaホテルのバー。ドリンクメニューをよくよく見ると、Beer Nigerと書いてある。まじで!!いやや落ち着け、前の日に行ったインド料理屋では、メニューに載ってるのに置いてなかったではないか。半信半疑でお兄ちゃんに「このニジェルビール、あるの？」と聞いてみると、冷蔵庫から出てきました、冷え冷えのキリンビール（ピアニジェールの通称、ラベルがキリン）。小畑ニジェル支所長もその存在に驚愕されその場で飲まれてました。

その日瓶ごとホテルに持ち帰ったら、従業員から「どこで手に入れたの？」って質問攻め。そんな幻のビールだけに嬉しさもひとしお。ニジェルが誇るビーフジャーキーKilichiと一緒にいただくと、ほろ苦くすっきりして美味しい。もうニジェルに悔いなし。

ということでニジェルビールが飲みたいかたは、ぜひBraviaホテルへ。11月2日現在、まだまだストックはあるとのことですが売り切れ必須です。ちなみにお値段1本2,000セーファーフラン、たかっ…



幻のキリンビールことBIERE NIGERとインスタ映えするI♥NIAMEYのオブジェ

11月の支所の活動紹介

【第2回・CARD ワークショップ開催】

国家稲作振興戦略(SNDR)の策定支援のためのワークショップ(2回目)が11月18日～23日の日程で行われました。前回同様、ニジェールのコメ政策にかかる主要なアクターが一堂に集い、7月に実施された第1回ワークショップの際に策定されたドラフトをもとに喧々諤々の議論が連日行われました。また今回もCARD事務局からセネガル人専門家 Sall さんが巧みな話術で議論を引っ張ってってくれました。

WS 初日。開始は遅れたものの、CARD フォーカルポイントである ONAHA¹ 総裁代理、サンディ顧問が議長役を務め、まずは参加者の自己紹介から始まりました。今回は、前回の参加者に加え、ニアメ大学農学部長や外務省アジア局長、商業省や計画省からの出席もあり、SNDR が農業省のみならず、他の省庁にとっても非常に重要な政策課題であることが見て取れました。一通り自己紹介を終え、小畑支所長から開会の挨拶が述べられました。その際、参加者全員に配布したニジェール支所のパンフレット²にも掲載されている ONAHA 無償機材供与案件にも触れ、本案件を通して ONAHA の機能強化が図られ、ひいては国のコメ生産量の向上にも貢献することが期待されると述べられました。前回に続く今回のワークショップは、それを政策面からサポートするものです。とりわけニジェール政府は、「2021年までにコメの国内生産量が国内需要を100%満たす」という目標を掲げています。具体的には、コメの総生産量 50 万トン(2015)から 3 倍の 150 万トン(2021)という、CARD の目指す、「コメ倍増計画」よりさらにハードルの高い数値を掲げています。しかしながら、現状は増え続けるコメの需要に対し、生産量はその 20%にも満たない状況で、80%を主にアジア諸国からの輸入に頼っています。

この無謀にも見える目標値の設定ですが、2 日目以降のグループワークでシミュレーションした結果、この通りに事が進めば、2021 年のコメの自給 100%はもちろん、2023 年には周辺国への輸出も可能(!)という夢のようなシナリオが出来上がりました。当然ながら何も政策も打たずにいれば、増え続ける人口と比例してコメへの需要はますます高まるわけですから、その分を輸入で賄うという、現状と変わらぬ状況が続いていくことになります。ニジェールのコメ生産のポテンシャルを最大限に引き出す上では、やはり ONAHA が果たすべき役割は非常に重要であり、ワーキンググループの試算では、既存の灌漑区の修繕を来年、再来年で 4,000ha、新規灌漑区を来年以降 8,000ha/年 開拓しなければなりません。

これらの数値やシナリオが、絵に描いた餅で終わることがないように、ONAHA のみならず、今回の WS 参加者すべての機関や組織が一丸となり、目標達成に向けて行動して欲しいと思います。

(企画調査員 佐々木タ子)



WS 初日。恒例の集合写真(2 列目向かって左から 4 人目の緑のシャツが Sall 氏)



WS2 日目-3 日目は全員で前回の SNDR のドラフトの見直し作業に取り掛かりました。



WS4-5 日目は 2 つのグループに分かれて議論を深掘りしていきました。

¹ 農業水利整備公社 (L'Office National des Aménagements Hydro-Agricoles の略。)

² ニジェール支所の仏語版パンフレットは、こちらからもご覧頂けます！支所員一丸となって、やっと出来上がった力作です。是非ご覧になってください。<https://www.jica.go.jp/niger/french/index.html> (CARD や ONAHA についての記述は、p.9 をご参照ください)。

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、全国的な女子就学促進のため、みんなの学校「フォーラムアプローチ」による全国 8 州での「州教育フォーラム」開催を UNICEF と協働で支援しています。10 月には「州教育フォーラムキックオフセミナー」を開催し、全国 8 州の地方行政、教育行政の代表者が、ニジェールの女子就学促進へ向けて一丸となって取り組むことを公言しましたが、11 月はその各州代表の宣言に基づき、「女子就学促進州教育フォーラム」を全国 8 州各地にて順次開催しました。

各州の教育フォーラムでは、全国で 140 万名以上もの 7～12 歳の就学年齢児童が未就学であり、特に新入生となるべき 7 歳女子児童の半分は就学機会を得られていないニジェールの現況に鑑み、今年度 2019/2020 年度の新入学児童数の増加、特に女子児童の入学促進がテーマとして取り上げられました。そして、州ごとの現在の就学・未就学状況や新入生の男女比率をもとに、各州 300 名にも上る参加者の喧々諤々の討議を経て、入学児童数の目標値、男女比率の目標値が決議され、地方行政を担う州知事、県知事、市長から、コミュニティの代表である学校運営委員会連合、地方教育行政の長である州教育事務所長や視学官、さらには伝統的首長や宗教指導者、教員代表など、それぞれのアクターが、フォーラム決議の実現と目標値達成へ向けた活動誓約を公に宣言しました。



写真左：州教育フォーラムの様子。各州 300 名近くの関係者が一同に会し、地域の教育の問題について協議しました。

今後は、州フォーラムでの決議目標達成へ向けて、コミュニティ、地方行政、教育行政などそれぞれのアクターの活動誓約が、学校運営委員会連合総会や住民集会を通して全国 2 万以上の学校コミュニティへと広がっていくとともに、全国津々浦々の村落にて、一人でも多くの子どもたちに教育機会を提供するため、住民による入学促進のための活動が展開されます。

(EPT 専門家 影山晃子)



写真右：フォーラム決議・活動誓約の共有にかかる学校運営委員会連合総会の様子。この総会に参加した学校運営委員会の代表が、各村落にて住民集会を通して情報を広げ、活動を実施していきます。

■■ PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト ■■■

みなさまご無沙汰いたしております。PASVA 総括の小川です。プロジェクト開始直後の5月号以来のご挨拶となってしまいましたが、今回はその後の進捗について簡単にご報告させていただきます。

ニアメの全5区でそれぞれの普及員によって行われている SHEP のグループ学習は、簡単なグループ学習の枠組が整えられた後、各メンバーの経営や技術レベルに関する参加型ベースライン学習が行われ、また各グループの代表による参加型市場調査が実施されました。その後それらの結果も踏まえ、問題分析、アクションプランの作成というプロセスに入っていきます。しかしこのあたりまで来ると、そろそろ普及員やカウンターパート達も SHEP の導入研修で習った内容だけでは現場でやるのが具体的に見えてこなくなり、実施の仕方に関する疑問が山積みになってきます。先月の 13~14 日に実施された SHEP 補完ワークショップはそのような要望に応じて、これから実施していく SHEP アクションプラン作成に向けた、問題分析等の細かいプロセス等を講習し、現場普及員の広範な疑問に応じていこうとしたものです。



小グループに分かれて課題を整理する



演習を通じて普及員がシミュレーションしたアクションプラン

今回の講習の中でもっとも興味深かったと思われるのは、後藤専門家がセネガルの SHEP プロジェクトで開発した問題分析の方法でしょうか。つまり問題分析をしていくときに、それを生産量に関わるもの、価格に関わるもの、コストに関わるものの3つのカテゴリーに分けて整理するやり方です。このやり方をすると、自分達がいかに市場に関する課題に対して気付いていなかったことがよくわかるのです。農家は生産に関する課題は非常によく自覚しています。また、資金に関わる問題はさまざまな課題の根本にあることも分析すればよくわかってきます。ただ、生産物の価格や市場に関する課題は自分達でコントロールできるものではないと思い込んで意識していないことが多いのです。いわば課題解決上の Boîte Noire(ブラックボックス)。このブラックボックスの存在に気付かせることがこの一つの目的で、これによって SHEP 学習グループのメンバーや普及員の目を価格や市場に関する様々な情報を収集することに向けさせ、さらにバイヤーに対するアクセスや価格や市場に関する様々な情報を収集することにその関心を向けさせることができるのです。



ブラックボックスについて説明する IPDR ジカ校長

少しゲテな話でご機嫌でも伺おうかと思えます。 写真は少し古いもので今から 10 年ほど前のこと。とある西アフリカ、雨期明けの昼下がりの焼けた砂道を、日本人を乗せた車がトコトコ、ガーガー走っていたと想像してください。助手席に陣取る日本人が見るとはなしに前方を眺めていると 20m ほど先を大きな影が横切ります。

「おろっ？ブツウじゃね。おう、止めてくんな」

「ガッテンだ旦那。鉈なたにするかい、棒かい」

「まずは棒をくんない」



棒といってもロバをぶったたくときに使うやつで、ごつい播粉木すりこぎのようなやつ。それを手にするや、一目散に影の後を追います。運ちゃんは後ろで鉈をさっと研ぐと、まずは車を路肩の枯草に乗り上げて駐車位置を確保しています。

後ろから近づくと、その気配に気づいた影はさっと一キロ四方唯一のストラクチャーである大きな切り株の陰に飛び込みます。

そーっと近づくと、頭かくして尻隠さず。細長い影がニョキつとはみ出ています。久しぶりに見る大物です。すかさずその影を踏みつけるや、振り向きざまに飛び出した陰に向かってエイッとばかりに播粉木一閃。

“スカッ”（空振りってか！）

でも踏みつけた足は放しません。何とか噛みつきこうとする影に二振り目をお見舞いしてやります。実際はビビって‘アワワワッ’と払った棒が偶然当たっただけですが。ようやく影の動きが鈍ったところへタイミングよく追いついてきた運ちゃんが、途中で拾ったという鉄棒でもってく 自主規制)、南無…。(写真参照)

次の村で水を分けてもらい、おなか掃除して、鱗を取って、塩振って、準備 OK。

道々今日の成果を自慢げに見せますが、ギャーッと叫んで逃げ惑う人続出。私の以前の任地で運ちゃんの出身地でもある村から遠く離れたその町で、こいつを食う習慣はありませんでした。ようやくできたのが最後の写真、リザード柄の皮目も美しい一品を運ちゃんと二人で思う存分いただきましたとき。めでたし、めでたし。

次第に消えゆく伝統習慣に敬意をこめて。

注意：登場人物の呼称はあくまでも彼自身の通名であり、一部の職業を蔑むような意図はございません。



ト影 1 <一部自主規制>



ト影 2 <一部自主規制>



ミレットと影

なかなか、ディープな逸話を頂き、どうもありがとうございました(汗)。

かくいう私も、ニジェールの農村に赴任して間もないころに、これを食したことがありますが、生前の姿からは想像もできないほど、淡泊なお味で、非常に美味しく頂いたのを今でも覚えております。ニジェールの農村では特に、こうした生きものたちが貴重なたんぱく源であることは言うまでもありません(Y.S)。



支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェルでゴミを集める日本人～シリーズ第24話。今回は、都市と農村の金属リサイクル事情について執筆頂きました。

先月号の支所便りでは、ニジェルの農村で女性たちが家のなかで新しい皿を大切に保管しているという話を紹介しました。女性たちが結婚するとき、母親は嫁入り道具を準備し、娘たちは結婚後に嫁入り道具のお皿を大切に使っていること、そして結婚生活が困窮したときには、母親が娘にお皿を購入して、苦しい生活のなかでも娘の結婚生活を支援していることを説明しました。女性たちが毎日の生活のなかで、大切にお皿をつかっている姿が浮かび上がって来ました。

今回は、わたしが緑化に使用している都市ごみのなかに金属製品が少ない理由について取り上げたいと思います。2018年6月号では、トラクター1杯分の都市ごみの組成をみました。トラクター1杯分のごみの合計は2,826キログラムで、そのうち砂と有機物が2,609キログラム(92%)、ビニール袋が189キログラム(6.7%)、石が17.4キログラム(0.6%)、金属ごみが第4位で2.48キログラム(0.09%)でした。このような都市ゴミはすべて農地に投入され、土壌を改善するのに使われますが、金属ごみにも大事な役割があります。ニジェルでは地中に、ものすごい数のシロアリが活動しており、枝や葉、わらなどの植物遺体、あるいは家畜の糞などの有機物はシロアリによって、またたく間に分解されてしまいます。正確にいうと、有機物が分解されるというよりも、シロアリ塚に運ばれて、餌として消費されます。

荒廃地にごみを投入する効果にはいくつかあり、やせ地に栄養分を添加したり、シロアリの生物活動によって団粒構造がつかられ、そして蟻穴を通じて雨水が浸透するという土壌の物理性を改善したり、あるいはハルマタンなどで運ばれてくる飛砂を受けとめ、砂の堆積を促すという効果が期待されます。これらの効果のうち、シロアリが食べることのない金属ごみが緑化に役立つというのは、飛砂の堆積を促すという効果です。地面に高まりを作ることによって金属ごみが飛砂を受けとめ、植物が砂に根を張ることができるようになります。

しかし、実際には、都市ごみのなかに金属が少ないのが現状です。それは、都市や農村には金属ごみを集める人々がいるためです。人々——その多くは少年たちで、少年たちが金属ごみを袋に入れ、回収業者に持ち込んできます。その買取価格は1キログラムにつき、100フランです。現金ではなく、ときにキャンディーやチョコレートが子供に渡されることもあります。

わたしが訪問していたとき、ふたりの男の子が袋を持って来て、その袋を台ばかりの上に載せました。3キロほどの重さがあり、子供には300フランが手渡されました。その中身はジュースやトマト缶、ネスカフェの空き缶、車軸、針金といった金属のほかにも、片足ずつのサンダルと薄汚い家畜の骨が含まれていました。



定期市におけるお皿の販売店：お皿やバケツ、ポットなどが各種、そろっています。



シロアリはゴミに群がり、枝や葉、わらなどの有機物を食べます。



都市の金属リサイクル・センター：金属回収業



リサイクルの担い手：回収業の主人(手前)と、金属を持ち込む男の子たち

その後、回収業者は金属とサンダル、家畜の骨に分別し、袋づめをします。回収業者は仲介業であり、大型トラックがやってきて金属やサンダル、家畜の骨を買い取っていきます。その買取価格は、金属が1キログラムにつき250フラン、サンダルと家畜の骨は50フランだと言います。回収業の主人に「サンダルと家畜の骨を販売しても、損をするんじゃないか」と言うと、「持ち込まれるごみを、客の目のまえで品目ごとに分別するのはやっかいだし、そのまま一括で重さを計測し、現金で買取をする。金属の販売で利益が出るから、サンダルと家畜の骨で、ちょっと損をしても大丈夫だ」という、おおらかな答えが返ってきました。

「家畜の骨は何になるのか」と質問すると、意外な答えが返ってきました。「学校で使うチョークにする」という話でした。チョークの主原料はカルシウムですから、家畜の骨を原料にするのは合理的です。ニジェールにも学校はたくさんできましたし、教室には黒板がありますから、チョークの使用量も増えているはずですが、チョークを作るのには貝殻や卵の殻を使うことがあるといいますが、ニジェールは内陸国ですし、家畜にはウシやヤギ、ヒツジ、ロバ、そしてラクダが多数います。

金属ごみは首都ニアメのカタコ市場か、あるいはナイジェリアのラゴスにまで運ばれ、リサイクルされるとい話でした。女性たちが大切に使った、ティヤやファンテーカという皿やそのふたは袋に詰め込まれて、リサイクルにまわされます。



男の子が持ち込んだ袋の中身：空き缶、サンダル、家畜の骨



お皿のふた：女性たちが使い込んだお皿は、リサイクルに回されます。

農村部には、金属ごみリサイクルのスペシャリストがいます。それは、各農村にいる鍛冶屋です。鍛冶屋は農村の生活に必要な家財道具や農具をつくり、それらの修理も請け負っています。ニジェールでは押し鋏という特殊な農具が使われていますが、この押し鋏の刃先も鍛冶屋がつくっています。この刃先の素材は自動車のボディーです。廃車になった車は解体され、古いがらくたのようなパーツはほぼすべて販売されます。ボディーは押し鋏に作られ、なんども修理されたのち、使えなくなると、今度はトウジンビエを収穫するナイフに変化します。また、女性による水くみにはバケツが必要ですが、バケツの底が抜けると、ファンテーカという大皿とそのふたで底が補修されます。

ニジェールでは、ほぼすべての金属ごみが回収され、新しい製品として生まれ変わり、ふたたび、大事に、そして徹底的に使い込まれています。子どもが300フランを受け取っている姿をみて、わたしは小学生のときにコココーラの瓶を探し、小売店に持って行くと10円をもらえたことを思い出しました。日本では10円の小銭でなにかを買えるというわけではありませんが、子どもながらも、自分の力でお金を手にしたという喜びがあったことを今でも鮮明に覚えています。わたしたちの使い捨て生活も、そろそろ真剣に見直す必要があるのだと思っています。



農村の金属リサイクル・センター：鍛冶屋が生活用具や農具をつくっています。底が抜けたバケツをファンテーカ(中央)とふた(右)で、底をふさぎます。



大変身：使えなくなったスコップの刃から、トウジンビエを収穫するナイフが作られます。木炭で書かれた線に切って、ナイフの材料に使われます。

ニジェールがこれほどまでにリサイクル大国だったとは(！)、嬉しい驚きです。都市ゴミの中の食べものについても、回収され、きれいに洗って調理され、再び消費されるというプロセスを、以前の大山先生の記事(2018年7月号)でご紹介頂き、このときは少なからぬショックを受け、それとは対照的な先進国の飽食文化や大量食料廃棄について、今一度考え直すべきだろうと、強く思いました。そして今回も、ニジェールが誇るリサイクル文化に、改めて感銘を受けました。こうして集められた金属のなかには、先月号に記述されていた「女性たちの食器」も多く含まれています。各家庭で、長きにわたって大事に使われたあとも、こうして、また別の用途で再び日の目を見る金属たち。「新しい製品として生まれ変わり、ふたたび、大事に、そして徹底的に使い込まれています。」という文章が端的にニジェールにおけるリサイクルの現状を言い表しています。これらの金属に人格があったとしたら、まさに金属冥利に尽きる、といったところでしょうか。

そういえば、ニジェールの農村では、水汲みにつかうバケツや食器類といったプラスチック製品も、継ぎはぎされながら、長く、そして徹底的に使い込まれていたのを思い出しました。使えなくなったサンダルも、形を変えていろいろなものに生まれ変わっています。

世界に誇る「もったいない文化」をもつ私たちも、その原点に立ち返り、あらゆるモノの消費について見直してみてもいいでしょうか(Y.S)。



巻末連載企画！ ^おODのいちおし

ニジェルに赴任して3か月経ち、気持ちも落ち着いてきた今日この頃、赴任当初の気持ちを忘れないよう、私が感じる Niamey Nyala(クールなニアメ、政府が推し進める素敵な街づくりのキャッチフレーズ)をまとめてみました(順不同)。



① 乾期になるとニアメ市内を運搬手段としてウロウロし始めるラクダ。やっぱりまだ行き会々と「うおー！ラクダ！」と思います。



(「デザインO」的に分解してみました)



③ ニアメ市内で入手する北部地方のアガデス産ニンニク。一個から61片出てきました！激ウマ。



② 割と最近できた手作りジェラート屋さん。RAWDA。マンゴー味、シトロン味がおすすめ(大玉1個≒80円也)。



④ なんでこんなに大きい？ドーナツ！(1個≒100円也)



⑤ 大地に沈む夕日。説明いらないですね。



⑥ 年代物のクラシックな日本製中古車。このカラーのチョイスもなかなか。

大出さん、こんなんもありますよ！



(企画調査員 大出理恵)